

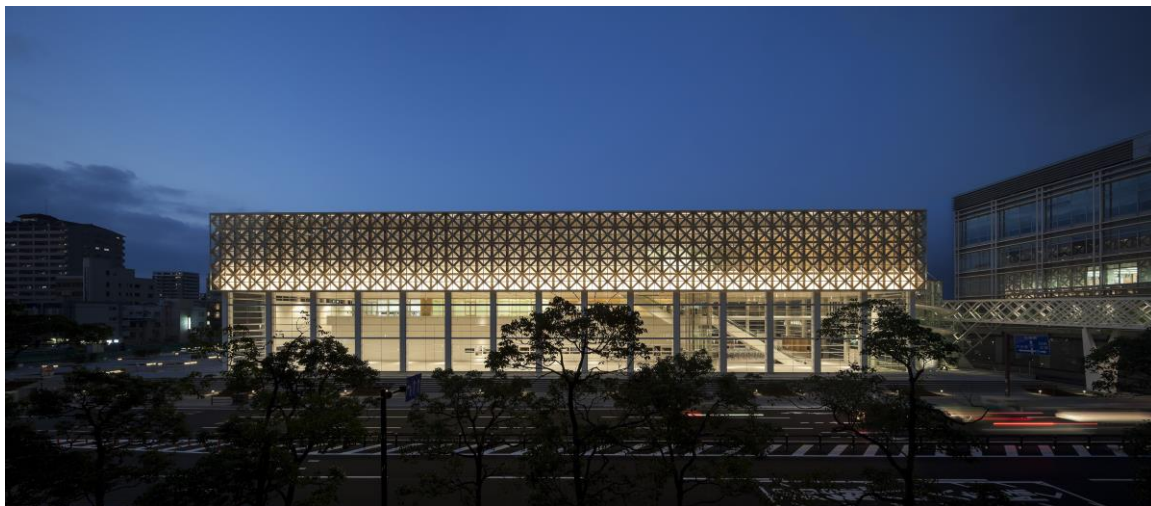
OPAM 大分県立美術館

Oita Prefectural Art Museum

美術館概要

アトリウム・3階天庭展示作品

教育普及



©Hiroyuki Hirai

温暖で風光明媚、豊かな自然に培われてきた、柔らかな県民性とアジアや西洋から異文化を受け入れ吸収しながら、伝統や風習に融合してきた大分県。

その県都大分市に大分県立美術館（OPAM）が2015年4月24日（金）に開館します。

大分県立美術館（OPAM）のコンセプトは次のとおりです。

・「五感で楽しむことができる」美術館

様々な視点、感覚を通じて、感性や創造性に訴え、訪れる人が五感で楽しむことができる美術館を目指します。

・「出会いによる新たな発見と刺激のある」美術館

大分と世界、古典と現代、美術と音楽など、様々な「出会い」をテーマにした企画展をとおして、新たな発見や刺激を受けることができる美術館を目指します。

・「自分の家のリビングと思える」美術館

美術館という敷居が高いイメージがありますが、来館者が自宅のリビングルームと感じられるような、気軽に立ち寄ることのできる美術館を目指します。

・「県民とともに成長する」美術館

次代を担う子どもたちから高齢者まで、すべての年齢層の県民と一緒に成長する美術館を目指します。



©Hiroyuki Hirai

設計は、世界的に活躍する建築家 坂 茂（ばん しげる）氏。

代表作の一つであるフランスのポンピドゥー・センター - メスや、紙や段ボールなど、手に入れやすく身近でリサイクル可能な素材を用いて展開した世界各地の被災地への支援活動などが評価され、2014年3月に建築界のノーベル賞とも呼ばれるプリツカー賞を受賞しました。

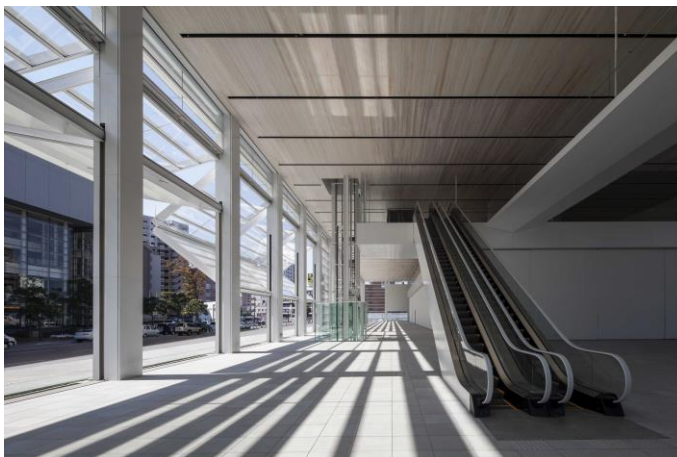
大分県立美術館（OPAM）は、向かいにあるiichiko総合文化センターとペDESTリアンデッキで結ばれるなど、街と一体化し、街に開かれた美術館です。

また、透明度が高く、どんな美術展示にも対応する、オープンにもクローズにもなる1階の展示室のフレキシブルで可変性に富んだ爽快な空間は、まさしく「常に変化しながら成長する新しいスタイルのミュージアム」といえるでしょう。

シンプルな箱形の建物をガラスで覆い、外壁のデザインは構造をそのままあらかわすことで、大分伝統の竹工芸をイメージさせる印象的なデザインを採用しています。

館長は、西武美術館・セゾン美術館やフリーランスの学芸員として数々の展覧会を手がけるなど美術界の注目を集める異才、新見 隆（にいみ りゅう）。

美術館では年4回程度の企画展に加え、大分が誇る約5000点の所蔵作品から厳選したコレクション展、そのほかワークショップやレクチャー等を開催予定。さらに、カフェやショップ、情報コーナーなどを設置し、誰もが気軽に立ち寄れる空間を提供します。



©Hiroyuki Hirai

建築概要

■規模

敷地面積 13,518㎡
建物面積 16,818㎡
階数 地下1階、地上4階建（展示棟3階、管理棟4階）
展示部門 3,891㎡ 展示室A・B、コレクション展示室等
収蔵部門 2,310㎡ 第1・2収蔵庫等
教育普及部門 976㎡ アトリエ、研修室等
サービス部門 1,678㎡ ミュージアムショップ、カフェ等
地下駐車場 3,245㎡
その他 4,549㎡ 管理研究部門等

■構造

地上部 鉄骨造（免震構造）
地下部 鉄筋コンクリート造
東西方向 85.5m
南北方向 56.4m
高さ方向 20.09m（展示棟）
24.77m（管理棟）

■ペDESTリアンデッキ

全長 約67m 幅員 約3m

■工事費

美術館本体工事費 7,245百万円
その他の工事費 795百万円
（ペDESTリアンデッキ工事、外構工事など）
合計 8,040百万円

大分県立美術館－開館に関するトピックス

1. 大分県の芸術文化の中心拠点として、2015年4月に、新しく県立美術館が開館します。
2. 国内の県立美術館としては、2006年の青森県立美術館、2007年の沖縄県立博物館・美術館の開館以来、8年ぶりに新設される美術館です。
3. 2014年3月にプリツカー賞を受賞し、フランスのポンピドゥー・センター・メスの設計や東日本大震災や世界各地の被災地への支援など、様々な活動によって世界的にも注目を集めている坂茂氏が手がける美術館です。
4. 西武美術館・セゾン美術館で学芸員として数々の展覧会を手がけ、2011年には「ウィーン工房1903-1932 モダニズムの装飾的精神」（パナソニック汐留ミュージアム）で第7回財団法人西洋美術振興財団賞「学術賞」を受賞した、武蔵野美術大学教授の新見 隆が初めて館長をつとめる美術館です。
5. 出会いの驚きと五感で楽しむ、唯一無二の、まったく新しいスタイルのミュージアム。大分から世界に向けてメッセージを発信し続けます。
6. JR大分駅に新しい駅ビルが完成、大分の市街地が大きく生まれ変わり、また、大分でJRのディスプレイーションキャンペーンが開催されるなど、大きなイベントを控える2015年に、大分県立美術館もオープンします。

プロフィール

新見 隆（館長）



大分県立美術館長。独自のキュレーションによって、ここでしか実現しない展覧会の企画を中心に、新しい美術館の創設を推進する。

1958年 広島県生まれ
 1982年 慶應義塾大学文学部フランス文学科卒業
 1982～99年 西武美術館・セゾン美術館に勤務
 1999年～ 武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科教授、イサム・ノグチ庭園美術館学芸顧問、慶應義塾大学アート・センター訪問所員、アート・ビオトープ那須、二期リゾート文化顧問
 2013年～ 公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団 理事兼美術館長

■専門分野

近現代デザイン史・美術史、現代芸術論、アート・デザイン・マネージメントを含んだニュー・ミュゼオロジー、ジャポニズムを端緒とした比較空間、空間感覚学から、美術・デザイン・建築の影響史、受容史、比較文化史、芸術社会学

■主な展覧会企画

「日本の眼と空間」1990,92,94 / 「バウハウス1919-1933」1995 / 「イサム・ノグチと北大路魯山人」1996 / 「ル・コルビュジエ展」1996 / 「デ・ステイル1917-1932」1997 / 「柳宗理のデザイン」1998 など (以上 西武美術館・セゾン美術館) 「現日本デザイン展」(ソウル国立現代美術館、1994、ゲスト・キュレーター) / 「その日に-5年後、77年後 震災・記憶・芸術」(川崎市岡本太郎美術館、2000) / 「表層を超えて-日本的物作りの手法」(国際交流基金主催、シンガポール美術館、マニラ・アート・センター、2003、ゲスト・キュレーター) / 「ウィーン工房1903-1932-モダニズムの装飾的精神」(パナソニック汐留ミュージアム、2011) / 「岡本太郎生誕100年記念展『芸術と科学の婚姻 虚舟-私たちは、何処から来て、何処へ行くのか』展」(川崎市岡本太郎美術館、2011)

■主な著作

『空間のジャポニズム-建築・デザインにおける日本趣味』(INAX、1992) / 『モダニズムの庭園と建築をめぐる断章』(淡交社、2000) / 『ミュゼオロジーへの招待』(武蔵野美術大学出版局、2015)

坂 茂（建築家）



OPAMの建築設計を手がける。県産杉材を活用した木の構造体とあらゆる展示やイベントに対応可能なフレキシビリティのある展示空間を設計に取り込んでいる。

1957年 東京生まれ
 1982～83年 磯崎新アトリエに勤務
 1984年 クーパー・ユニオン建築学部を卒業
 1985年 坂茂建築設計を設立
 1995年 災害支援活動団体 ボランタリー・アーキテツ・ネットワーク (VAN) 設立
 1995～2000年 国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) コンサルタント
 2001～2008年 慶應義塾大学環境情報学部教授
 2010年 ハーバード大学GSD 客員教授、コーネル大学客員教授を務める
 2011年10月～ 京都造形芸術大学教授

■主な作品

「カーテンウォールの家」 / 「ハノーバー国際博覧会日本館」 / 「ニコラス・G・ハイエック・センター」 / 「ポンピドゥー・センター-メス」

■主な受賞

フランス建築アカデミー ゴールドメダル (2004) / アーノルド・W・ブルーナー記念賞 建築部門世界建築賞 (2005)、日本建築学会賞作品部門 (2009) / ミュンヘン工科大学 名誉博士号 (2009) / フランス国家功労勲章オフィシエ (2010) / オーギュスト・ペレ賞 (2011) / 芸術選奨文化科学大臣賞 (2012) / フランス芸術文化勲章コマンドゥール (2014) / プリツカー建築賞 (2014)

CDL 平野敬子 × 工藤青石 デザイナー



OPAM のシンボルマークデザインとネーミングを手がける。同館におけるコミュニケーションデザインを担当する。

平野敬子
デザイナー／ビジョナー
コミュニケーションデザイン研究所 所長

1959 年 兵庫県生まれ
1986 年 初個展「光と影の肖像」で安井賞にノミネートされ、以来グラフィックアーティストとして活動
1994～96 年 パリに居住
1997 年 HIRANO STUDIO を設立し、本格的にデザイン活動を開始
2005 年 コミュニケーションデザイン研究所 (CDL) を工藤青石と共に設立
2013 年～ 大分県立美術館「OPAM」のシンボルマーク、ロゴタイプ、サイン、コミュニケーションデザインを開発
2014 年 2020 年東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムデザイン審査委員をつとめる

■主な作品、活動等

資生堂「qiora」のブランドデザイン (2000) / 東京国立近代美術館のシンボルマーク、ロゴタイプ、VI 計画 (2002～) / 「時代のアイコン」展の企画、構成、編纂 (2004) / NTT ドコモの携帯電話「F702iD 所作」のプロダクトデザイン、トータルディレクション (2006) / 東京国立近代美術館60 周年記念シンボルマーク、デザインディレクション (2012)

■主な受賞、収蔵

毎日デザイン賞 (2001) / 亀倉雄策賞 (2013) / パリ装飾芸術美術館にデザインの作品約450 点が収蔵 (2014)

工藤青石
デザイナー／クリエイティブディレクター
コミュニケーションデザイン研究所 代表

1964 年 東京生まれ
1988 年 東京藝術大学卒業。資生堂入社
1992～96 年 パリに駐在。海外市場に於ける化粧品デザインの中心に、ブランドイメージのディレクション、広告、グラフィックデザイン、空間デザインを手がける
2002 年～ 東京藝術大学非常勤講師
2005 年 コミュニケーションデザイン研究所 (CDL) を平野敬子と共に設立
2013 年～ 大分県立美術館「OPAM」のサイン、web、グラフィックを中心にコミュニケーションデザインを開発中

■主な作品、活動等

資生堂「qiora」のクリエイティブディレクション (2000) / NTT ドコモの携帯電話「F702iD 所作」のプロダクトデザイン、トータルディレクション (2006) / 三越ギフトプロモーションのクリエイティブディレクション (2006～) / 化粧品イブサのパッケージデザイン (2008～) / 資生堂プロフェッショナルのクリエイティブディレクション (2010～)

■主な受賞

毎日デザイン賞 (2001)

ユーラシアの庭、あるいは「愛」の思想の現前 —甦る神話としての、「オランダ、日本の、現代 トップ・デザイナーの出会い」。

坂 茂による大分県立美術館（OPAM）建築の最大の目玉である、巨大アトリウム。

そこに、「ユーラシアの庭」が出現する。

オランダの商船、「リーフデ号」（オランダ語で、「愛」だ）が、白杵の先の小島、黒島に漂着したのは、今を遡ること四百年余。

白杵の人人が助けた乗組員のなかには、後に幕府の顧問となる、ヤン・ヨーステンや、三浦按針（ウィリアム・アダムス）などがいた。

オランダ・デザインの貴公子、マルセル・ワンダースは、ヨーロッパ中世以来「死のイメージ」（「メメント・モリ＝骸骨を見て、死を思う」）と、とりわけ17世紀オランダに特有の「静物画」を合体させ、「生と死」が循環するシンボル「死の花花」を、大きなゴム製の風船、バルーンでもって、大分にプレゼントする。ケルト以来の「ユーラシア的」なる「生死の循環思想」の伝統は、日本にもあり、かのラフカディオ・ハーンが喝破したように、「日本は、死者たちがお盆やお彼岸にやって来る」「死者のいる国」だからだ。

迎え討つのは、伝統的＝アヴァンギャルド的クリエイティヴな、今までに無い独創的なテキスタイルの達成で、現代デザインをリードする、須藤玲子。大分の伝統工芸、竹や竹編みの技法に触発されて、アトリウム二階面を、水面に見立てた、アジアの精華、「ロータス、蓮の花の水底」、水草浮き草の、光とテキスタイルの大シャンデリアだ。

日本の風土はその亜熱帯気候や伝統によって、「水」の文化が根強い。

OPAMアトリウムに、ほんのり光輝く「陰影礼賛的」シャンデリアの下で、私どもは、またその生物的祖先たる「水生の生き物」に、輪廻転生する。

それは現代21世紀の、「オランダ VS 日本対決」ならぬ、国東安岐の哲人思想家、三浦梅園がいったように、「世界は、正反対で、表裏一体の、片割れの出会い」、その今まで離れ離れで出会わなかった、半身片身どうしが、互いを見だし、結び合う、「愛」デザインの現前なのである。

（註）「死の花花」のコンセプト、およびオランダ「静物画」にも根強い伝統であるのは、マルセル本人からきいたものでもある。
ハーン云々は、建築家児島学敏先生の、受け売り。ケルト的輪廻転生は、鶴岡真弓さん説。
梅園の史実は、国東市三浦梅園資料館研究員、浜田晃さんおよび同館資料などから学んだもの、思想解釈はそれらをベースにして、自分独自に再解釈したもの。

ユーラシアン・ガーデン・スピリット



マルセル・ワンダース 《ユーラシアン・ガーデン・スピリット》 2015年 膨らませたポリ塩化ビニル

《ユーラシアン・ガーデン・スピリット》は、マルセル・ワンダースによる2015年に開館する大分県立美術館のために制作されたサイトスペシフィックなインスタレーション。

16世紀にオランダの商船が日本に初めて到着したという歴史的な物語にインスピレーションを受けた本作品は、オランダと日本の文化的なつながりと交流を象徴している。

重りが入った約5メートルのバルーンで構成されたインスタレーションは、風をうけ、おだやかに動き、それぞれのバルーンには花々のパターンで顔が描かれている。

《ユーラシアン・ガーデン・スピリット》は世界的に知られる17世紀、オランダ絵画を代表する静物画、ヴァニタスの現代的再解釈でもある。花が時の流れと自然のサイクルを思い起こさせると同時に、「死すべき運命」という主題が作品の顔に表現されている。

空気で膨らまされたバルーンは、この世に再び蘇った、原初の「旅人」が抱いた自由な精神と、世界に広がったオランダの思想、両方へのオマージュをはらんでいる。

空気と風は、生命の息吹やオランダの精神の本質である外に開かれた姿勢を喚起させると同時に、互いの文化に染み渡りような相互的な文化交流という植民地時代に対する新たな解釈のきっかけとなる。（マルセル・ワンダース筆）

マルセル・ワンダース

アムステルダムを拠点に世界的に活躍するプロダクト&インテリアデザイナー、アートディレクター。個人クライアントからAlessi、Bisazza、KOSE（コスメデコルテ）、KLM オランダ航空、Flos、Swarovski、PUMAなどのブランドでのデザインを手がけるなど、その数は1700件を超える。デザイナー、職人、ユーザーが再び密に関係する「デザインの新時代」を目指しながら、驚くべき発想力、大胆さ、並外れた探求心から生まれる、詩的かつ幻想的、ロマンチックな世界を表現する。

ユーラシアの庭 「水分峠の水草」



須藤玲子 《ユーラシアの庭「水分峠の水草」》 2015年 ポリエステル、ポリカーボネイト

自然と向かい合い、自然と自分との関係を考えることは、私の重要なテーマの一つであった。思い返せば若い頃、私はもっぱら花鳥風月を題材にした絵を描いていた。生まれ育ったのが小さな田舎町だったこともあり、日々の暮らしは、四季折々の季節の中、自然との対話そのものであった。そんな経験を経て、私は絵を描く事から遠ざかり、布づくりに携わるようになった。しかし森羅に対する畏怖と恋慕は今も続いている。

ここ大分は、九重山(くじゅうさん)を源として有明海に注ぐ、筑後川に沿って栄えたといわれている。九重町(このえまち)とその先の湯布院町との間には、水分峠(みずわけとうげ)がある。その名の通り、筑後川もこの峠から峰々の水を集め、有明海を目指し流れ下る。川の源には、清水が湧き出ているだろう。そして水草が、川面一面を占めていたに違いない。

川の流れは人を原始の自然へと誘う。人々は川へ引き寄せられ、魂は遙か天空を漂い、ここユーラシアの庭に到達する。ここは水分峠であり、同時にユーラシアの庭でもある。そして庭に浮かぶ物体は水分峠の水草であり、同時にユーラシアの森羅万象でもある。(須藤玲子筆)

須藤 玲子

茨城県生まれ。武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科テキスタイル研究室助手を経て、株式会社「布」の設立に参加。現在取締役デザインディレクター。英国UCA芸術大学より名誉修士号授与。東京造形大学教授。毎日デザイン賞、ロスコー賞等受賞。日本の伝統的な染織技術から現代の先端技術までを駆使し、新しいテキスタイルづくりをおこなう。作品はニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館(米)、ヴィクトリア&アルバート美術館(英)、東京国立近代美術館工芸館等に所蔵されており、代表作にマンダリンオリエンタル東京などがある。

アトリウム展示

「大分観光壁」 —ミヤケマイによる「セカイ平和ヨ、開ケ、鳩時計」



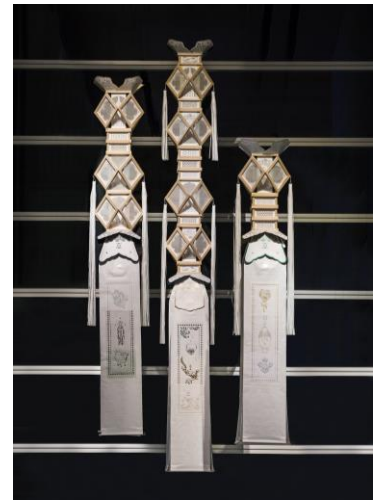
1



2



3



4

ミヤケマイ

1. 《世界は届けい・セカイハトドケイ 大分の中心で家内安全を叫ぶ》 2015年 ミクスト・メディア
2. 《水府 覆水難収・フクスイオサメガタシ》 2015年 ミクスト・メディア
3. 《もどる場所があるということ》 2015年 ミクスト・メディア 撮影: 繁田諭 Photo: Satoshi Shigeta
4. 《おかえりなさい。》 2015年 ミクスト・メディア

一階アトリウムの西壁を、演出するのは、現代作家に制作依頼した、「大分のための」、「大分の伝統が、現代に甦る」のをイメージした、「アート観光壁」である。

日本の伝統的な、故事来歴や室礼に通じて、それらをポップで現代的な表現に再生する名手、ミヤケマイが、「何処の家庭でもあり」、「平和と団欒のシンボルだった」、「鳩時計」を、大分を中心に「セカイ地図」のように制作設置する、大インスタレーションを展開する。さらに、見えたり隠れたり刻々変化する「大分大和絵巻」と、水をテーマにしたインタラクティブな体験型の「プール」、大分伝統の切子灯籠が巨大な依代となって現代に姿を現す作品を、制作した。

「大分」を、愛と平和の中心にヴィジュアルイズする、まさしく、「神話の再創造」。

ミヤケマイ

日本の伝統的な美術や工芸の繊細さや奥深さに独自のエスプリを加え、過去と現在、未来までをシームレスにつなげながら物事の本質を問う作品を制作。媒体を問わない表現方法を用いて骨董、工芸、現代アート、デザインなど既存のジャンルを問わずに天衣無縫に制作発表。水戸芸術館、Shanghai Duolun Museum of Modern-Art、POLA美術館、森美術館、世田谷美術館での展示及びワークショップのほか、村越画廊、壺中居、Bunkamuraギャラリーなどで個展多数。銀座メゾンエルメス、慶應大日吉キャンパス来往舎ギャラリーなど、企業や大学でもサイトスペシフィックなインスタレーションを手がける。2008年パリ国立美術大学大学院に留学。『膜迷路』（羽鳥書店/2012年）など3冊の作品集がある。www.maimiyake.com

3階天庭展示

「天庭」

— 「五感」の出会う、現代工芸作家インスタレーション



徳丸鏡子 《四大エレメントよりー火および水》 2007年 磁器、鉄
徳丸鏡子 《原初の庭》 2013年 陶
磯崎真理子 《クリスタル・フラワー》 2008-09年 アクリル彩色、テラコッタ
高橋禎彦 《光を呼ぶ、雨を求める》 2015年 ガラス

「天庭(あまにわ)」とは、美術館3階のロビー空間を彩る、ガラスで囲われた空に抜ける庭。四季や、自然の天候そのものを、ゆったりとした時間のなかで、身体全体で体験してもらおうという趣向。この色彩と素材の交響する庭を演出するのは、日本の現代工芸における3人のトップランナー。ミラノで活躍した亡き磯崎真理子は、クリスタルな透明を追求しながら、テラコッタに色を吹きつけた、「どこにもない、イメージの花」をつくる。白い陶で、無限に、夢幻に、内側から花咲く生命の躍動をかたちづくるのは、「生を言祝ぐ(ことほぐ)」徳丸鏡子。吹きガラスの第一人者、高橋禎彦は、持ち前の自在な「ジャズ」感覚で、「人間みなアーティスト」とばかり、見る者をワクワクさせるような、透明な「遊具」をつくった。日々歳歳、変化し続ける、ミュージアムならではの、「成長の庭」が、こうして生まれた。

徳丸 鏡子

1963年 東京生まれ。多摩美術大学大学院絵画科油画専攻陶芸コース修了。91年滋賀県立陶芸の森美術館「変貌する陶芸・国際現代陶芸展」より作家活動を開始。96年より日本・アメリカ・アルゼンチン・台湾11か所のアートプログラムで滞在制作。2006年ポロック・クラズナー財団奨学金、13年タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞受賞。ボストン美術館、フィラデルフィア美術館(米)、鶯歌陶磁博物館(台湾)、岐阜県国際現代陶芸美術館、他で作品が収蔵される。

磯崎 真理子

1964年 東京生まれ。90年、武蔵野美術大学工芸工業デザイン科(陶磁専攻)を修了。92年、ファエンツァ国立工芸学校(伊)を修了し、2005年には、文化庁派遣芸術家在外研修としてイタリアへ派遣渡航。イタリア、日本両国で作品を発表するが、13年9月逝去。ファエンツァ国際陶芸博物館(伊)、石川県立九谷焼技術研修所、草月美術館、日航ホテル関西空港、さいたま広域合同庁舎、他で作品が収蔵、設置される。

高橋 禎彦

1958年 東京に生まれる。80年、多摩美術大学美術学部立体デザイン科修了後、同研究室にて副手。82年から84年にかけて、ドイツ、ラインバッハのグラスハウスアムヴァサートゥルム工房にてアシスタントを務める。85年より神奈川県相模原市に工房をかまえ、現在、多摩美術大学教授。北海道立近代美術館、東京国立近代美術館、横浜美術館、下関市立美術館、クストパラスト美術館(独)、コーニングガラス美術館(米)、ヴィクトリア&アルバート博物館(英)、他で作品が所蔵される。

教育普及

大分県立美術館の教育普及では、作品と出会う喜びや美術の楽しさを体感するため、子どもから大人まで、参加した皆さんと一緒に、身体と感覚を使った体験活動を行います。そして、モノ・コト・ヒトをつなぎ、コミュニケーションを大切にした「美術と人との出会いの場」をつくります。

みる、つくる、かんじる 「スクールプログラム」

美術体験とコレクション鑑賞を組み合わせ、美術の楽しさや郷土の魅力を体感します。そのほか美術館スタッフを講師とした出張授業や先生のための美術館活用講座も開催予定。



みる、つくる、かんじる 「夜のおとなの金曜講座・お話から体験まで」

歴史、文化、社会、自然、そして大分県の魅力を美術の視点から見たお話会です。



みる、つくる、かんじる 「みんなの土曜アトリエ・体験から鑑賞まで」

身体と感覚を使って全身を活性化。身体をたくさん使って展示室に行こう！そのほか、実技講座も開催予定。



どなたでもワークショップ 「アトリエ・ミュージアム いっしょにつくろっ！」

いろいろな素材に触ったり、作ったり、描いたり。小さなお子さんから大人まで、だれでも参加自由。主に日曜日に開催します。遊びに来てね。



アウトリーチ・プログラム 「空を眺めて」

地域の魅力を発見したり、美術そのものを体感したりするワークショップを地域で開催。県内全域が美術館になるかも。



特別ワークショップ&レクチャー

夏休みなどの長期休み期間に、じっくり制作に集中するワークショップや、教材ボックス、企画展に関連した特別講座を開催予定。



大分県立美術館オリジナル教材ボックス

OPAM BOX

身近なモノに目を向け、そこに在る美を発見する独自の視点を獲得できると、美術作品に出会ったとき、見方、楽しみ方はいっそう膨らむ。大分県は、山、海、河に自然はあふれ、数多くの遺跡もあり、文化的行事も少なくない。こうした大分の自然・環境・風土・歴史・文化に目を向け美術的視点でとらえると、県全域が博物館と言えるような魅力的にあふれている。美術館教育普及グループでは、この大分の自然・環境・風土・歴史・文化に目を向け、オリジナルの教材ボックスを創る。この教材ボックスを、ホールでの展示をはじめワークショップやレクチャーで活用し、来館者の好奇心を触発し認識の拡大を促しながら、展示作品に対して能動的な視線を生み出す補助教材として、さらに日常から美術の世界へ足を踏み出すことを誘いたい。将来的にはアウトリーチ・プログラムでの活用や学校への貸し出しをも視野に入れていく。

■教材ボックスの構成

全体は4つのボックスからなり、実物標本をはじめ様々な素材や道具、あるいは所蔵作品に関連した画像や資料により、身体と感覚に直接訴える内容とビジュアルで構成する。

A ストーン・ボックス

大分県内より採集した土・石より制作した顔料と展色材による色見本を制作。あわせて富貴寺大堂壁画・臼杵石仏他、県内石仏で使用していると推定される顔料と鉱物を収納。また小鹿田焼で使用されている土・粘土・化粧土と釉薬、道具から皿、器を集める。

B プラント&メディシン・ボックス

植物への好奇心を触発し、色や形からイメージーションを刺激する。植物染料である紫根、漢方薬となる植物、そしてサフラン、七草イ（しっとうい）など、大分には昔から生活に密着しているものが多い。また竹には様々な種類がある。竹工芸の編目組目パターン、道具に加え、その他、杉・檜・クヌギ他県産材にも目を向ける。

C CC・ボックス (Calcium Carbonate/炭酸カルシウム)

石灰岩、大理石、方解石。建築材料から日本画顔料まで用途が変わると名前も変わるが、もともとはすべて同じ炭酸カルシウム。石灰岩を中心に、漆喰、鏝絵の道具や歴史、そして風連鍾乳洞、小半鍾乳洞、稻積水中鍾乳洞など自然の造形美をおさめる。

D マテリアル&テクニク・ボックス

美術館所蔵作品より制作工程や素材について焦点を当てる。将来的には県内の工芸作家、さらには浮世絵と木版画など、素材と技術と表現の関係に迫っていく。

OPAM

[お問い合わせ]
大分県立美術館 企画広報課
宇都宮・高司
Tel : 097-533-4500
Fax : 097-533-4567
E-mail : info@opam.jp
<http://www.opam.jp>